大連外国語学院日本語学部学生の日本語作文に見られる誤用

佐藤修子
盧鳳俊

目次

1. はじめに
2. 誤用について
3. 表記の誤り
4. 語彙の誤り
5. 文法の誤り
6. 表現の誤り
7. おわりに

1. はじめに

筆者佐藤は，1991年2月末より7月初めまでの1学期間，大連外国語学院日本語学部において，2年生と3年生各約100名，合計約200名の学生を対象に作文の授業を受け持った。授業は1クラス週1回，中間に10分の休憩をはさんだ50分2連続の100分授業で，1クラスの人数は，約40名（2クラス合併）のクラスと約60名（3クラス合併）のクラスが各学年1クラスずつであった。1学期間の授業回数については，合計15回のクラスと17回のクラスとがある。ここでは今回の作文指導の具体的カリキュラムについて詳しく述べることはしない。そもそも作文教育は日本語教育全体の枠組の中で，基礎日本語等，他の科目と連係して指導案が作成されるべきものと考えるが，学院での日本語教育の具体的内容について，事前にはほとんど何の情報も得られなかった。作文指導を行っていくうちに気づいたことは，あるテーマを与えて自由に作文を書かせると，中国語で考えた文を日本語に翻訳して意味不明瞭な文を書く，ある

いはどこかで読み覚えた日本語の文をそのまま書き写す，難しい文を書きたがり，かえって易しい単純な文が書けない，等である。原稿用紙の使い方から始めて，文章の種類について講義し，「です体，ます体」と「だ体，である体」の使い方を教え，実際に作文を書かせていくといった，当初予定していた作文指導の計画は，数回の授業の後，大幅に変更せざるを得なくなった。体について言えば，いつまでも混同して使うところを見ると，かえって混乱を招いたようで，「です，ます体」で徹底的に作文をさせた方が良かったのではないかと思っている。また，「会話文を書き言葉の文章に書き直す」，あるいは「あるテーマについて書かれた文章（原稿用紙１～２枚程度）を半分位の長さに要約する」と言った課題は，そもそも書かれた文の内容（最近の現代文）を正しく理解するのが難しいことが判明した。その後の指導は，やさしい文型練習と文型を応用した作文，文型を積み重ねて少しずつ長い文章を書いていく方法に変えた。しかし，平易な言い方は作文にはそぐわないと考えるのか，あるいは，文章に凝る中国語の作文の影響か，３年生のクラスでは，書けないにもかかわらず，また特に，日本人に意味不明の文章を書く学生に限って，易しい文章を敬遠する傾向があるように見受けられた。このことは，基礎日本語の教科書や日本語教育の方法と深く関わっていると思う。そして，中国語の文章を日本語に翻訳する教育を徹底的にした方が，中国人の学生にとってはより効果的であり，自分の表現したいことをより的確に日本語で書けるようになる近道かも知れないという感想をもった。

さて，本稿では，最終回に提出してもらった自由作文に見られる様々な誤用の中から，特に３年生の作文を中心に，多くの学生に共通するもので，今後の作文指導や日本語教育にとって参考となるような，或いは，教師が認識しておくべきと思われる基本的な事象をいくつか取り上げて整理し，若干の検討をしたい。但し，誤用の原因を探るにとどまり，語学的な分析には立ち入らない。

学生の日本語学習歴については，各学年５クラスのうち，３クラスの学生が，既に中・高等学校で６年間日本語を学んできている。他の２クラスは，中・高等学校時代に英語を学び，日本語は大学に入って始めたという学生がほとんどである。会話力につながる基礎日本語は１・２年目で履修する。読む能力や日本語を中国語に翻訳する力は別として，「話

す」「書く」といった能動的な力は，2年目までに修得したものの段階に留まっており，訓練する機会が少ないだけ，かえって3年生の作文に基本的な誤りが見られることもある。また，既に6年間日本語を学習してきた学生と，大学に入ってから始めた学生との日本語能力の差は，3年目後期の段階になると，幾人かの例外を除いて，全体としてはあまり感じられない。これは，英語を学習する生徒の層が厚く，また全国各省から優秀な人材が送られて来ているという，学生の質と熱心さにもよるらしい。

なお，筆者盧は3年生5クラスのうち，2クラスの学生を対象に，1年目と2年目の基礎日本語の授業を担当している。

2. 誤用について

授業中にその場で作文させるのと，ある程度の時間的余裕を与えて作文を提出させるのとでは，作文にかなり違いが見られる。最終回の作文は，テーマについては，自分で決めても良いし，また教師が与えたものの中から選択してもよく，横書原稿用紙3枚（1200字）以内にまとめるという条件で，一週間の時間的余裕を与えて提出させたものである。この作文の中には，ほとんど完璧とも言える日本語で書かれ，間違いの見あたらないものがある。普段授業中に書いてもらう作文には，このようなことはまずない。あまりにも日本語らしい表現であることから，何かの書き写しであろうと推測される。書き出しの文とまとめが自分の言葉で書かれている場合には，中間に置かれた本文との対照があまりにも鮮明で，本文が何かの書き写しであることが一読して分かる。誤用を扱う場合に難しいのは，何かの書き写しであることは推測できるが，どこからどこまでが書き写しで，そこに見られる誤りが，学生のものなのか，原文に既に誤りがあるのか判断できない場合である。ガイド専攻の学生には，卒業後の仕事を意識してか，故郷を紹介する作文を書く者が何人かいた。原文となる観光案内文は，中国語から翻訳されたもので，時々間違いがある。学生はこのようなテキストを丸暗記して覚え込むらしいが，同時に間違いも覚えることになる。ここでは，そのような判断のつきかねる誤用も含めて扱う。

次に誤用の定義であるが，吉川は「我々日本人話者が一読して，あるいは聞いて，“奇妙だな”と感じたものが誤用」であるとし，誤用の種類を①発音の誤り，②表記の誤り，③語彙の誤り，④文法の誤り，⑤表現の誤りの5種に分類している[1]。この分類に従って誤用を扱うが，作文での誤用であるので，発音の誤りは除く。発音の誤りからくると考えられる表記の誤りについては，表記の誤りのところで扱う。また，同じ誤りでも複数の解釈が可能な場合があり，分類はあまり厳密なものではない。なお，誤用には〜を符し，中国語は〈〉でくくるが，学生の誤用としてあげる場合には〈〉でくくらず，後に対応する日本語を（）に入れて書く。

3. 表記の誤り

3.1 原稿用紙の使い方

中国語では，書き出しや段落の初めは二マスあけるので，日本語の作文でもついうっかり2字あけてしまうようだ。最終的に作文を提出した2年生90名のうち7名，3年生97名のうち2名が，中国語の使い方をしており，時々不注意で2字あけてしまったり，後で誤りに気づいて自分で訂正した者も含めると，日本語の使い方に慣れていない学生が，2年生では21名，3年生でも5名いた。

マスの使い方で気になるのは，促音や拗音「きっ／きょ」等を一マスの中に書く，あるいは「」，〈〉等の符号に一マス使用せず，文字と一緒に書く例が多くみられることである。符号に一マス使用するのは，中国語も同様であるので，不注意によるものと考えられる。

句読点をマス目の中央に書く学生がかなりいる[2]。縦書きの場合は，中国語では中央に書くのが正しいので，誤用がでるのは当然としても，横書きの場合は日本語と同じであり，中国語は現在ではほとんど横書きなので，正しい使い方を習慣づけさせるべきと考える。少数ではあるが，句読点を行の最初に書く学生がいる他，句点と符号，符号と符号が重なる場合の書き方などにも問題がみられ，きちんとした指導が必要である。

3.2 句読点

句点を書くべきところに読点を書く学生がいる。日本語では，終止形がくるとそこで文が終り，句点を打つ。中国語には，終止形，連用形，連体形といった語形変化がないので，文がそこで終っていようと，後につながっていようと形の上では区別がない。句点をどこに打つかは，書き手がどこまでをまとまりのある一つの文と考えるかによっている。[3] つまり，非常に雑な言い方をすれば，自分の言いたい内容が続く限り読点を打ち，まとまった話として区切りをつけたい時に句点を打つ，というのが中国文の句点のつけ方と言える。[4] その影響によるのか，日本語の作文でも段落の最後の文にのみ句点を打ち，残りはすべて，つまり文の終りにも読点を打つ学生がでてくる。また，段落の書き出しと，中頃と，最後の文に句点が書かれている場合には，学生がどういうまとまりで中国語の文を考えているのかが推測できる。読点の続く限り，学生はまとまりのある文章として，また句点まで気持が続くものとして表現したいのだ，と考えられる。中国語の干渉で，誤用と意識せずに終止形の後にも読点を書く学生がいる一方，不注意で，無秩序に誤った句読点の打ち方をする学生もいる。いずれにしても，日本語では，文の終りをつげる終止形の後は，必ず句点であることを教えて徹底させれば，容易に正せる誤りである。

3.3 符　号

日本語で読点に用いられる「、」は，中国語では〈顿号〉と呼ばれ，単語を並列するときに使う。日本語での読点符号にあたるものは〈豆号〉といい，日本語でコンマ（,）と呼んでいる記号がそれにあたる。日本語での読点ではなく，コンマを使う学生がけっこういる。

縦書きの中国文ではかぎかっこが使われるが，横書きの場合には使われないため，かぎかっこの向きが逆だったり，会話の部分に中国語で用いる符号「：“”」（〈冒号〉と〈引号〉）を使ってしまう場合がある。〈引号〉ではなく，正しくかぎかっこを使っている場合でも，その前に〈冒号〉を入れてしまうこともある。

他に符号の使い方で異なるのは，日本語では書名にふたえかぎ（『』）を用いるが，中国語では〈书名号（《》）〉を用いる点である。正しい使

い方を教えておかないと，学生はふたえかぎが使えず，書名に〈书名号〉かかぎかっこを使う。また，中国語では山パーレン（〈〉）も〈书名号〉といい，題名などに使用するため，学生がレポートのタイトルに〈〉をつける可能性もある。

繰り返し符号の「々」は中国語でも使うが，日本語の作文で使用している学生はほんの数人にすぎず，ほとんどの学生が「色色，段段，人人，日日，女女しい，所所，節節，我我，遅遅，数数，年年，村村」等と書く。また，「々」を平仮名の繰り返しに用いた誤り「そのま々」もみられる。

3.4 文字表記の誤り

少数ではあるが，平仮名，特に「た」「な」「を」等が不正確で，場合によっては判読できない字を書く学生がいる。また，うっかり間違いと思われるが，平仮名と片仮名を混同して書いている例もある。気になるものとして，送り仮名の誤り，清音と濁音の誤り，そして中国の文字(多くは〈简体字〉であるが〈繁体字〉もみられる）を頻繁に使うことがあげられよう。次に，項目別に例をあげる。

3.4.1 送り仮名の誤り

誤用には，「恥じ」のように不要な送り仮名をつける場合と，「結（ば）れている」のように（）で示すような送り仮名が脱落する場合とがあり，「皆な／幸わせ／悩（み）／夏休（み）」等の名詞の例と，「たち返えらせる／違がう／帰える／対いする／悩やむ／従がう」等の動詞の例がみられる。送り仮名の誤りの原因は，教師が正しく送り仮名を教えていないか，学生が正しく理解し覚えていないかのどちらかであろう。上記の誤用の動詞については，活用のある語は活用語尾を送る[5]ということを，また，名詞については一般に送り仮名を付けない（但し「幸せ」は例外）が，活用のある語から転じた名詞及び活用のある語に「さ」「み」「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは，もとの語の送り仮名の付け方によって送る[6]ということを教えておけば，かなり間違いが少なくなると思われる。学院では，送り仮名は辞書を引くと分かるため，特に指導はしていないが，動詞の変化を教えるために，送り仮名を付けさせるテ

スト等はしている。但し，基礎の段階で動詞を教える時に，「る」の前が「あ，う，お」の段で終るのが五段動詞，「い，え」段で終るのは一段動詞と簡略化して教えるため，「帰る」を一段動詞と勘違いする学生が出てくる。先の誤用例で「帰える」と送り仮名を付けたのは，「始まる」（五段動詞），「始める」（一段動詞）等からの類推で，「帰る」を一段動詞と解釈したとも考えられ，この場合には文法の誤りということになる。なお学生は，入る，要る，蹴る，帰る等の五段動詞は特殊な例外として，「ます」に続く時には「り」，「て」「た」の前では「っ」となる[7]と学習する。中・高等学校から日本語を学んでいる学生は，無意識に間違うことはあっても，意識すればこれらの動詞を正しく使うことができる。しかし，大学に入って日本語を始めた学生にとって，「る」で終る五段動詞を覚えることは難しく，一段動詞と混同してしまうことが多い。

この他に，「送り込む／書き入れる」といった複合動詞の仮名の送り方が難しいようだ。「その複合の語を書き表す漢字の，それぞれの音訓を用いた単独の語の送り仮名の付け方による[8]」という本則を教えておく必要があろうが，読み間違えるおそれのない場合は，送り仮名を省くことができ[9]，この許容が，送り仮名を難しくしていると思われる。

3.4.2 清音と濁音の誤り

「とこかに行って／哀れて」等のように，不注意で濁音を落としたと考えられる誤りや，「また」と「まだ」のように意味を正しく区別して覚えていないことからくる語彙の誤り，また「青春のごろです」のように，「ころ」と「ごろ」の使い分けが難しいため起こる誤り，「傾いで」のように，発音からくるとも，動詞を「傾ぐ」と考えたとも解釈できる誤りなど様々である。しかし，一番多くみられるのは，「うなずぐ／待ちごがれる／ずうど昔／貧しくで／そごで／五十年たっだら／ちゃんど／生きていだ／拒絶されだ／軽蔑しだ／愚痴をこぼし」等，発音からくると思われる誤りで，特に中国各地から学生の集まるガイド専攻のクラスに多い。

3.4.3 漢字の誤り

不注意によるのか，日本の漢字を知らないため，中国の漢字で間に合

わせようとするのか明らかではないが，日本の漢字と〈简体字〉をよく混ぜて書く。例えば「紧張／師范／发揮／实現／收穫／习慣」等。また，中国語を使っていると考えられるが，それに対応する漢語があり，漢字も一部日本語と共通しているため，一見すると上記の誤用例に似ているもの，「恋爱（愛）／正确（確）／破坏（壊）／万岁（歳）／事业（業）／修养（養）／效果（効）／现（現）代／基础（礎）／大陆（陸）性／异（異）性／同时（時）／建筑（築）／将（将）来／农（農）村／生态（態）系」等が，かなりみられる。これらは，学生が中国語と意識して使用しているのか，日本語にもあることを知ってはいるが，漢字が書けないので〈简体字〉で間に合わせたのかよく分からない。同じような例として「贯（貫）／耻（恥）／钱（銭）／陷（陥）」等もあげられよう。中国語を使用しているが，中国語の知識のない日本人には，日本語の書き誤りと見える例が，「制（製）造／文学奖（賞）／自满（慢）」等である。また「障碍（害）」は，当用漢字では「障害」と書くが，日本語でも使用されるため，日本語を使っていると解釈されやすい。中国語をそのまま使用していることが明らかな例としては，「对手（相手）／外表（外見）／渐々（だんだん）／街（通り）／稍稍（少々）／铺（敷）いて／借鉴（参考に）する／根除（排除）」等があげられる。これらは，表記の誤りというよりは，語彙の誤りとして扱うべき問題であろう[10]。日本語にもあると考えて，中国語を日本語らしく書こうとしたと思われるのが，「諮詢〈谘询〉（諮問）」である。また，中国語の〈繁体字〉を日本語の漢字と考えて混同して使う例，「従う〈从〉（従）／稱賛〈称赞〉（称賛）／鄰〈邻〉（隣）」もある。その他，偏は日本の漢字，旁は〈简体字〉という誤り，「訊刺〈讽〉（諷）／観迎（正しくは〈欢迎〉（歓迎）で観と歓を間違えている）」，「厄い病気」にみられるように，中国語の〈厄害〉から日本語の「ひどい」にあたる字を考え出すといった例もみられる。中国語と深く関わるこういった誤りは非常に多く，漢字だから理解してもらえると考えるためなのか，辞書を使う手間を省いて，安易に中国語を使ってしまうことに原因があると思われる。日本の漢字は中国人教師にとっても難しく，確信がない場合には，中国語で板書しあとで調べると言いながらついそのままにしてしまいがちである。

日本語で漢字の使い方を誤るのは，字形が似ているか，発音が同じで

あることによる。「無（舞）台／乗（垂）れる／婦（帰）る／暦（歴）史／緑（縁）故」は前者の，「価値感（観）／純結（潔）／乗り返（換）え／誤（謝）まりたい」は後者の，「有意議（義）／響（郷）里／観（歓）呼の声」等は，どちらともとれる誤りの例である。「婦／帰」は中国語でも同じく〈妇／归〉なので，学生のうっかり間違い，「暦」については，中国語の〈厉〉は「暦」にも「歴」にも使うので，学生は日本語で知っている方を書いたと思われ，「価値観」は中国語にもあるので考えすぎによる誤り，「潔」は中国語では〈洁〉と書くので，その干渉かもしれない。この他，「冷」を「冷」と書いたり，隧（隊）商路／汽（汽）車」等，「隊」と「遂」また「気」と「汽」を混乱させてしまう誤りもある。

3.4.4 片仮名表記と外来語

強調のつもりなのか，「キシ（君）／ここでパッ（はっ）とした／ジヤマ（邪魔）者」等，片仮名を使う例がみられる。最初の例は「ミ」と「シ」を混同した誤りであるが，他に「クライコクス」のように「コ」と「マ」を書き誤る例もある。片仮名の書き方で気になったのは「ン」を「ン」，「ホ」を「木」と書く学生がいることである。「ジヤマ者」は拗音を小さく書くのを忘れた例，「パッと」は「はっと」と「ぱっと」を正しく使い分けて覚えていないためと考えられ，語彙の問題である。

外来語の表記では，「リラック（リラックス）／チンス（チャンス）／ハブ（パブ）／センタ（センター）」等，単語を知っているがなんらかの理由で表記を誤ったもの，「ウオーキング・ショーズ／ゴールディンシーズン」等のように少し間違って覚えているもの，「スモータ（スマート）」のように正しく覚えていないもの，「マコポーロ」のように中国語を片仮名書きしたため「ル」が落ちたもの，等がある。最後の例は人名によく起こりうる誤りで，例えば「ブッシュ大統領」は中国語では〈美国总统布什〉と書き，学生は日本語のニュースでも聞いていない限り，「ブシ」あるいは「ブッシ」と書くものと思われる。その他，「ラッシュ：アワー」のように，不必要な符号を入れてしまう例もある。

4. 語彙の誤り

4.1 中国語の使用

既に，漢字の誤りのところで述べたように，中国語をそのまま日本語として使用する例がかなり多い。対応する漢語が存在し，中国語と意味や用法が同一の場合は，使用する者が，日本語にその語が存在することを知った上でのことであろうとなかろうと，誤用は生じないだろう。しかし，表記が同一で，意味が類似していても，意味にずれがある場合には誤用が生ずる。作文などのように，書かれたものは読み返すことができ，文脈や漢字によって内容を推測しうるが，会話では誤解されたり，日本人に理解されないことも起こりうる。〈簡体字〉を含めて，中国人の使う日本語は，多少の違和感や不自然さがあっても，意味が通じるため，誤用と意識して訂正することをつい怠りがちになるが，正しい日本語を教えるべきである。

日本語にはないが，文脈から意味が読みとれる中国語の例として，「終点線（ゴール）／井（井戸）／通道（通路）／聞名（有名）／社会学家（者）」等があげられる。また，文脈から判断できるので間違って理解されることはないが，日本語にも存在し，意味や用法が異なる例として，「獲得者（受賞者）／中国境内（中国国境内）／日本語の初級階段（段階）」があげられよう。やはり文脈から意味を取り違えることはないが，中国語と日本語では用法が反対であるための誤用，例えば「呼声（叫び声）／叫（呼ぶ）」もある。また「迷惑に陥る（惑う）[11]／発現（発見）／合流（一致する）」等は，中国語の知識がないと，日本語の意味にとらわれて理解にとまどう誤用例，「頓悟する（たちまち悟る）／真諦（真髄）／知音（知己，親友）／悲傷でした（非常に悲しかった）」等は，理解が難しい例である。中国語の知識のない者に，このような作文の添削は不可能であり，日本語の添削は日本人にしかできないからという理由で，他の教科との連係や中国人教師との協力なしに，作文教育のみを日本人教師に受け持たせるカリキュラムのあり方には問題があると思う。

中国語をそのまま使用して，あるいは日本語に翻訳して使用した場合に，名詞と共に使われる動詞が異なり，誤用が生ずることがある。「役割を立っています〈起作用〉（役割を果たす，担う）／成果が取れる〈取得

成果〉（成果があがる，得られる）」等がその例である。また，「啓発を受け取る」のように，中国語でも〈受〉のみ使うが，〈受〉に対応する日本語訳として「受ける」と「受け取る」とがあるため，日本語を意識しすぎて中国語にないものをわざわざ選び，誤用となる例もある。

中国語を日本語として使う場合，日本語での品詞が分からないため，助詞や活用語尾を省略し複合語のようにして使う誤りが多い。「公平競争」を例にあげると，「～に～する」という型は学習しているので，「公平に競争する」と「に」を入れることはできる。しかし，「公平な競争」のように名詞を修飾する形の場合，「公平」の品詞が分からないため，「な」を入れることができない。「発展歴史」は中国語で〈的〉が入らないため，中国語をそのまま使い，「の」が脱落したと考えられ，「周囲環境」は中国語の作文ならば恐らく〈周围的环境〉とするところを，中国語で考え日本語にしようとしてかえって混乱していると考えられる。「勉強生活する場所〈学习，生活的场所〉／独立生活能力／家庭主婦／外国友人」等は，どのような語を補ってよいか分からず中国語をそのまま使用したか，日本語にもこのような複合語があると考えたかのどちらかである。「新科学技術発展」は中国語をそのまま使ったとも，日本語の「新科学技術」と「発展」を合成したとも解釈できる例，「無責任感」は日本語の「無責任」と「責任感」を，また，「家庭主婦業」は中国語の〈家庭主妇〉を日本語化したものと日本語の「主婦業」を一つに結合したものと解釈できる。

4.2　語の製造

中国語でも日本語でもない中間の語を自分で造って使う例がかなりみられる。その中には，中国語と同じ語が日本語にも存在することを知らないために起こる誤用があり，例として「非必要（不必要）／入校試験（入学試験）／玄門（校門）」等をあげることができる。

語の造り方は，「食代（食費，食事代）と本代」のように，日本語の類推によるもの，中国語と日本語を合わせて考え出したと思われる「文化遺財（日本語の文化財と中国語の〈遗产〉）」の他，「院員（孤児院の職員の意味）／寝元（枕元）」等がある。「身陰」は中国語の〈身影〉（身体の影）を日本語にしようとしたものらしいが，かえって日本人に

は理解しにくくなっている。日本語は「影」でよいのだが，〈身影〉に対応する日本語がないと考えたために，また「陰」と「影」の発音が同じであることから，「陰」を使ったものと思われる。中国語の〈统治〉にあたる日本語の「支配」に「人」をつけ，中国語の〈统治者〉を日本語で「支配人」としている例もある。日本語の「者」と「人」の使い方の違いを意識させたり，日本語と中国語を対比させて語彙を教える必要があるだろう。

この他，「利口圆滑」や「自分全身の才能を発揮する〈发挥自己全部的才能〉(自分の才能を残らず発揮する)」のように，中国語を日本語にしようとして，どちらにもないものを造る例が，合成語にもみられる。また，「全力挑戦と全力苦悩が青春の本質ですく全力挑战和全力苦恼是青春的本质〉」は，中国語の翻訳による日本語の作文の好例としてあげられよう。

5. 文法の誤り

5.1 助詞

文法の誤りでは，まず第一に格助詞をあげることができよう。中でも特に多いのが，「は」と「が」の誤りで，中国人に限らず，日本語を学ぶ外国人にとって難しいものの一つであり，誤用分析や学問的研究も多いので，ここでは誤用例はあげない。

「は」と「が」以外で目につくのが，自動詞と他動詞の区別がつかないことが原因と思われる「が」と「を」の誤り，「またお金をかかり／長い時間をかかる／靴のゴムと靴を離れてしまった／美しいゆめを残りました／自分の望みがかなえる」等，である。他に，動詞と形容詞を正しく認識していないため起こる誤り，「改善できることを望ましい」等もある。

場所を表わす「に」「で」「を」の区別も難しいようだ。「～にいる，～にある」と「～で～する」との違いを教わっていても，何か別の要素が加わったり，文が長くなると，文全体を見ることに考えがいかないため，「大連ではリラの花もあればねむの花もあります」としたり，「アカシアの花は広州もあれば北京もあります／自分の家でもいるような気がしま

す」と「に」を落としたり，「教室には人で一杯でした」のように，「～は～です」と「～には～がいる／ある」を混同する学生が出てくる。また，「教室を寄る時／いつも流行の先端に行く」といった「を」と「に」の誤りが多い。中国語には，場所を表わす機能語，即ち前置詞はあっても，格助詞にあたるものはないので，誤りが多いのは当然である。助詞ではこの他にも，「に」と「が」の誤りや，「が」と係助詞「も」の誤り，接続助詞の「て」と「と」の誤用などがみられ，どのような指導や予防策を講ずれば誤用を少なくできるかが，詳しい分析と共に，今後の課題となろう。

5.2 中国語の〈的〉に由来する「の」の誤り

中国人の典型的な誤用としてよくあげられるのが，「の」である。「節約に対するの意識〈对节约的意识〉／自分自身に対するの考え〈对自己自身的想法〉／靴を修理するの産業〈修鞋的行业，修鞋业〉／一生にも忘れてならないの旅（一生忘れられない旅）〈一生难以忘记的旅行〉」等は，中国語の〈的〉の翻訳から来る誤りである。学生は，日本語では動詞が名詞を修飾するときは終止形[12]，とかなり徹底的に教え込まれているので，うっかりした初歩的な誤りと見なされる。不必要な「の」を入れる誤用例としては，この他に「私たちの若者にとって〈对我们年青人来说〉／毎年の四月二十二日は世界地球の日〈每年的四月二十二日是世界地球日〉／それからの六日目〈打那儿以后的第六天〉」等がある。最初の誤用例については，このような同格の場合は，中国語でも〈的〉が不要であるが，日本語でも「の」が必要ないことを知らなかったためと思われる。二つめの例にみられるような「毎年の」の使い方がかなり多い。年間行事として決まっていることには日付だけで充分であり，「毎年」という言葉そのものが不要であることを教えるべきと思う。「それから」の場合は，順序を表わす接尾語がくる上記の例や，「それから三日後」のように「の」がつかない場合と，「それからの生活」のように「の」が必要な場合，「それから三日間，それからの三日間」のように，どちらもありうる場合とがあるので，難しい問題であり，教師がその規則性を認識していること，また沢山例をあげられることが必要となってくる。

顧海根は，中国人学習者の誤用の一つとして，形容動詞の連体形「～な」

を使えずに，〈的〉の類推で「の」を使ってしまう例をあげている。[13] 同じ誤りは「誠実の態度／活発の性格」のように学生の作文の中にも見つかる。しかし，逆の例もある。「おおぜいな人／悠久な歴史」にみられるように，名詞を形容動詞と考えたり，また名詞にも形容動詞にもなりうる語の場合には，その判断が難しいために起こる誤りである。

「の」に関する誤用の一つに，脱落する例がある。中国語の干渉と思われる例としては，「今まで苦しい壁や消極的な自分が消え，生活も楽しく素晴らしいものに変わって行くと思います。〈到現在障碍和消极的自己消失了〉」という文がある。中国語には〈的〉が入らないので，日本語にする時にも「今までの」というふうに「の」が入れられなかったのであろう。[14]

「人類の暮らしの幸福のために〈为了人类（的）生活的幸福〉（より正しくは）〈为了人类生活得幸福〉」も中国語の翻訳による「の」の誤用と言えよう。〈得〉も〈的〉と同様に，日本語では「の」になると考えられている。また「暮らし」という語から，名詞を意識して連体修飾語を作る「の」を使っていると解釈できる。日本語では，「人類が幸福に暮らすために」と文の形にするのが自然であり，名詞句にするにしても「幸福な生活」とは言えるが，「生活の幸福」とは言えない。中国語でも〈幸福的生活〉[15] という言い方があり，形容詞が名詞を修飾する形になっている。誤用例の元となっている中国文でも〈生活〉は動詞，また〈幸福〉は形容詞であり，中国語の文法と，日本語と中国語の語順の違いを意識させることによって，より効果的な教育が可能になると思う。

〈的〉と「の」の結びつきの強さは，全くの不注意からであろうが，「当時的天水はシルクロードの経由地」のように，「の」のつもりでそのまま中国語を書いてしまうような誤りさえあることにも表われている。

5.3 動詞の誤り

動詞の誤用で一番目につくのは，自動詞と他動詞である。中国語では自動詞と他動詞には形態の区別がなく，意味によっている。例えば〈开始工作〉は「仕事を始める」と「仕事が始まる」の意味を持つ。初級段階で動詞を学ぶ時に，「～が始まる，～を始める」の形で助詞と共に覚えるが，学習する語彙が限られているのと，文が長くなると注意が行き届

かないためか，誤りが非常に多い。自動詞と他動詞の区別ができないことからくる誤りは，助詞「が」と「を」の誤りとなって表われ，既に例をあげたのでここでは省略する。動詞の誤りとして表われる例は，「それは，各国人民に地球の環境をよく守ることを注意させるよう国連がきまったのです〈決定〉（決める，決まる）／佐石の娘洋子をもらって育ちました〈养育〉（育てる，育つ）」等である。自・他動詞に関しても，「自分の殻に閉じ込んでいる／蘭洲の建設のために力を尽ります〈为了兰洲的建设尽力〉」のような，語を製造する例がみられた。「閉じ込める」という他動詞は知っているが，「閉じ籠る」という動詞を知らないため，「入り込む」等の類推で「閉じ込む」という自動詞があると考えたのであろう。また後の例では，自動詞「尽きる」は知っているが，他動詞「尽くす」を知らないので「尽くる」を考え出したものと思われる。

5.4　その他の文法の誤り

可能表現にさまざまな種類の誤用がみられる他，可能と自発，尊敬と可能，使役と受身，受給表現，形容詞の名詞化，複文での連接の仕方，テンスやアスペクトに関する誤り等，非常に多岐にわたる。文法の誤りについては，既にあげた例も含めて，個別に取り上げ，稿を改めて分析と言語的考察をしたい。

6.　表現の誤り

「個別に見れば語彙も文法も間違っていないのに，全体として見るとおかしな文になるもの」を，吉川は表現の誤り[16]としている。そのような誤用例は別の機会に譲ることにし，ここでは，一つ一つの文についてではなく，作文全体としての表現の問題，即ち，普通体と丁寧体，また話し言葉と書き言葉の混同について一言触れておきたい。体を統一して書くことは難しいらしく，誤りのなかった学生は，３年生97名のうち52名である。が，そのうち少なくとも８名は自分で文章を書いているのではなく，何かを書き写している。この８名中，５名は普通体，３名が丁寧体の文章である。この８名を除く，体の一貫している学生の中，普通体で書いているのは13名，丁寧体で書いているのが28名である。残り45名

は，程度の差はあるが，体を混同して使っている。不注意で混同していると思われるもの，どこかで読み覚えた言い回しを自分の文章の中に取り入れたために，その箇所だけ体が変わったと思われるもの，文法との関わりである表現のときに，どちらか一方が使えないと推測されるもの等がある。文法に関連した例をあげると，普通体で書かれた文の中にでてくる「責任感を持つでしょう／食べられるでしょうと予想した」は，「だろう」という語を知らないための誤りである。接続助詞と結び付く時にも，普通体が使えず丁寧体になる例「ですから／～のですけど」がみられる。また「である体」を意識するあまり，「弱いであった」としてしまう誤用もある。丁寧体で書かれた文章では，否定の過去形が作れず普通体にしたと思われる例「満足しなかった（満足しませんでした）」がある。

話し言葉と書き言葉の混同も見られる。「窓ぎわのトットちゃんを読んだことがある。とてもおもしろいよ／体に精いっぱいあふれていたんです／捨て落ちた食糧はあつめて多くあるよ」といった話し言葉が，唐突に出てくる。学生は映画やテレビドラマで耳にした，あるいは日本人留学生の話す日常語をこなれた良い日本語と判断するのか，聞きかじりの日本語を使いたがる傾向がみられる。日本語では，話し手は聞き手と自分との関係を判断しつつ，文体を使いわけている。中国語ではこれに対応するような文体の区別がないので，普通体と丁寧体の混乱が起こるのも当然で，敬語の使い方だけでなく，文体も含めて，日本語を使うにあたっては，「話し手の聞き手に対する関係の把握が前提[17]」であることを，分かりやすく明確に教える必要がある。

7. おわりに

3年生の作文にみられる多種多様な誤用の中から，比較的共通していると思われるものを取り上げてみたが，言葉の使い方と同様，誤用も個人差が大きい。多くの学生に共通しているのは，漢字を媒介とした誤用である。日・中両言語に共通するものとして，漢字は互いの言語を学びやすくしていると同時に，より正確な言語習得のさまたげともなっている。漢字の利点を生かした言語指導，特に中国語と日本語の共通点と相

違点を意識させるような教育が必要と思う。

［注］

（1） 吉川武時「誤用分析1」日本語学　第1巻第1号，pp. 120－121。

（2） 吉川も同様の指摘をしている。注(1)参照。

（3） 大河内は「中国文では文がひとつにつながったものなのか，いくつにも切れたものなのか，複文を扱う限り，それも連合複文（主従複文に対して）を扱う限り，書き手のその時の感じ方にまかされているということが多い」と述べている。大河内康憲「中国語の文と句の連接」日本語学　第5巻　10月号，P. 67。

（4） 中国語の句読点の書き方にも，例えば接続詞が使われている場合には，その前に句点を打ち前の文を一旦止め，接続詞を用いて次の文につなぐといった規則がないわけではない。また，句読点，特に読点をどこに打つかで文の意味が全く変わってくるので，中国語では，句読点を打つことは非常に重要であり，また難しいといわれる。

（5） 昭和48年内閣告示，昭和56年一部改正の送り方の本則による。『現代用字辞典』岩波書店　P. 593。

（6） 同上．P. 594。

（7） 「る」で終る動詞の他，特殊例として教えるものに「く」で終る「行く」がある。

（8） 『現代用字辞典』　P. 595。

（9） 同上．P. 596。

(10) 先に誤用例として中国文字で書かれた漢語をあげたが，中国語に対応する漢語あるいは「同形語」といわれるものの中には，元来中国語と表記が同一で意味が類似していても，一部重ならないことがあるため誤用が生ずる場合がある。例えば，学生はよく「勉強が緊張で」と使うが，この場合の緊張は，しなければならない勉強が沢山あり忙しいという意味で使われている。中国語の干渉による語彙の誤りということになる。

(11) 迷惑は中国語では〈麻烦〉

(12) 中国語では〈学校的生活〉（学校（の）生活）のように名詞が名詞を修飾するとき〈的〉を用いるが，〈干净的房間〉（きれいな部屋）や〈学习，生活的场所〉（勉強し生活する場所）のように形容詞や動詞が名詞を修飾するときにも〈的〉を用いる。

(13) 顧海根　「中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞，係助詞

「も」，接続助詞「て」などを中心に－」 pp. 105－106。

(14) 中国語の〈到現在〉は「現在に到るまで，現在に到っては」の意味であるから，日本語にすると「今まで，今でも，今では」等になる。学生は「今まで」という訳語しか知らないため誤用が多い。一例をあげると，「今まで，私はふるさとを帰るたびそんなところへ行きます。」があり，ここは，「今でも」としなければならない。本文の誤用例も，後続の文によっては，「今では」と言い変えが可能になる。

(15) 〈幸福的生活〉の〈幸福〉と〈的〉が結びついた形は〈定语〉と呼ばれ連体修飾語，誤用例の〈生活得幸福〉の〈得〉の後に来る語は〈补语〉と呼ばれ，程度を表わす。他に〈幸福地生活〉という言い方もあり，〈幸福地〉は〈状语〉と呼ばれ，連用修飾の形になっている。〈的〉〈得〉〈地〉の発音はすべて同じ「de」である。

(16) 注(1)参照

(17) 佐治圭三 「中国人学習者の間違えやすい敬語表現」 p. 40。

[参考文献]

大河内康憲 (1986)「中国語の文と句の連接」『日本語学』第5巻10月号，pp. 67－75。

顧海根 徐昌華(1980)「中国人学習者によくみられる誤用例－疑問詞用法と受身文を中心に－」『日本語教育』41号，pp. 47－60。

顧海根(1981)「中国人学習者によくみられる誤用例(二)－動詞，形容詞，代名詞などを中心に－」『日本語教育』44号，pp. 57－69。

顧海根 (1983)「中国人学習者によくみられる誤用例－格助詞，係助詞「も」，接続助詞「て」などを中心に－」『日本語教育』49号，pp. 105－118。

佐治圭三 (1983)「中国人学習者の間違えやすい敬語表現」『日本語学』第2巻，1月号，pp. 38－49。

菱沼透(1980)「中国語と日本語の言語干渉－中国人学習者の誤用例－」『日本語教育』42号，pp. 58－72。

吉川武時 (1982-3)「外国人の日本語 誤用分析1－6」『日本語学』第1巻第1号，pp. 120－121. 第2号，pp. 118－120. 第2巻1月号，pp. 121－125，2月号，pp. 115－119，3月号，pp. 120－122. 4月号，pp. 115－119。

岩波書店辞典編集部編 (1989)『現代用字辞典』岩波書店。

愛知大学中日大辞典編纂処編 (1988)『中日大辞典』大修館。

Some Examples of Mistakes in Japanese Composition by the Students of Dalian Institute of Foreign Languages

Shuko SATO
Lu Feng Jun

The students in the second and the third years have a class of Japanese composition once a week for one semester. There are about hundred students in one year. In 1991, one class of Japanese composition consisted of 40 students and the other class consisted of 60 students. A Japanese native speaker teaches the Japanese composition class. There is no teamwork between Chinese and Japanese teachers.

The mistakes reported here are collected from the last Japanese composition of the third year students. They include errors in orthography, in grammar, in vocabulary and expression, and those caused by pronunciation. Nearly every student constructs sentences in Chinese and translates them into Japanese. There are mistakes due to interference from Chinese, for example "de" in Chinese and "no" in Japanese, and grammatical errors because students cannot distinguish between intransitive and transitive verbs. The Japanese and Chinese languages have Chinese characters in common. There are many mistakes connected with the use of Chinese characters. Students use Chinese words directly very often. This appears as an orthographic error. Although they write Japanese "kanji" correctly, they commit errors in vocabulary, because they think that the word has the same meaning in Japanese as in Chinese. Students use Chinese words if they don't know Japanese words. When they write correct centences, it is impossible to know if the students are aware of specific words as used in Japanese. Students make up words which do not exist either in Japanese or Chinese, even though an appropri-

ate word exists which is the same in both Japanese and Chinese. It is necessary to make clear to them the common features of and the differences between Chinese and Japanese.